

ほとけの混和会だより

平成二十五年一月
東光院
仏の混和会
第94号



平成二十五年元旦

檀信徒各位様に於かれましては、お健やかに新年をお迎えの事とお喜び申し上げます。本年度も、皆様のご多幸を祈り、仏道を精進して参りたいと存じます。合掌



巳年を迎えて
平成二十五年巳年、この「巳」とは、蛇の形から生まれたものだそうです。

蛇は古来より神聖な生き物として、仏教との関わりも大変深いものがあります。ブツダの言葉を書いた経典、スッタニパータに次のように記されております。「内に怒ることなく、世の栄枯盛衰を超越した修行者は、この世と、かの世をともし捨て脱皮して捨てるようなものである」(中村元約「仏陀の言葉」より)と釈尊は説いて下さいました。この世の名譽、榮譽、繁栄、更に極楽に往生を願う心も捨てて一切を御仏にゆだね、万人の幸を願う大いなる慈愛心を抱く人間に生まれ変わりたいと言います。東光院としても、古い慣習の上に成り立っていた、お寺のあり方や住職としての姿勢を蛇の殻のように脱ぎ捨てて身を正し、共に生きる道を築いて参りたいと存じます。



還暦



ねえねえ、お坊さんは、おいくつですか？

君は、何時も痛いところを質問するね。

実は、昭和二八年生まれなんじゃ、世に言う「還暦」と言う事だね。

私は、この還暦を人生の生まれ変わりの年と位置づけているのじゃよ、要するに私は生まれたての〇歳児と言う事なんじゃ。多くの人は六十歳で停年を迎え、仕事を辞めたたん、「今後どのように生きて行ったら良いのだろうか？」などと、生き甲斐を無くし、元気を失ってしまふようじゃが、お坊さんの世界は六十歳までが修学の期間と私は思っているのじゃよ。六十年も生きて居ると、己の欲望も少なくなつて「我」を振りかざす事の空しさも見えてくるのじゃ。

人間は六十歳を迎えた頃から、ようやく眞の生きる道が見えてくるように思えるのじゃよ。これからは、坊主の一年生として、人々の幸を願いながら、生きて行かれたら眞の幸が得られると思うのじゃ。お坊さんの仕事はこれからだね。

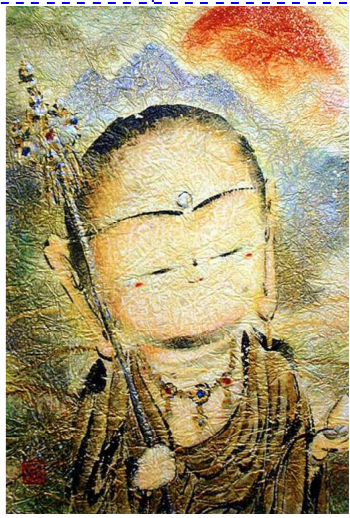
平成二五年度の目標は、昨年度の仏の家族の構築に加えて「共に仏と成る」と定め精進致したいと存じます。

仏教は「成仏」に成ることを目的とした教えですが、死んで仏に成ると言う事ではありません。

仏とは、インドの覚者と言う意味の「ブツダ」と言う言葉を、漢字で「仏陀」と書き、略して仏と言っております。覚者とは、宇宙の存在や大自然の営みの中に様々な命が生かされている。と言う事の真理を顕かに悟り、様々な命を救済する、大いなる慈愛心を会得された人と言います。人間本来の生き方に目覚めた人なのです。

その仏に成る為のプロセスが事細かに、様々な言葉や例え話などを以て、お経に記されております。そこで、平成二五年度は、昨年度の「共に生きる仏の家族」と言う課題に「仏に成る」と付け加えて、精進して参りたいと存じます。

「お坊さん、僕のような子供でも悟れるのですか？」
「もちろん、悟れますよ。小さな気づきを、沢山重ねて行けば何れ大きな悟りとなるのですよ。」



「地藏菩薩」

お地藏様は、大地が全ての命を育む力を蔵するように、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込み、救う所から、地藏菩薩と名付けられております。又、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道、この六道の世界に迷う人々を救わんが為、それぞれの世界に一人ずつ六人のお地藏さんがおられると言われております。私達も御地藏様の慈愛心をまねながら、精進して行きたいものでございます。



そうじゃな、お地藏さんは死後の世界の人々も、この世に生きる人々も、どちらも

ねえねえお坊さん、お地藏さんは、死後に迷う人々を救って下さるのでしょ？

『節分会』

二月三日(日曜) 午後三時より



招福を祈念して、豆まきを致します。12才、24才、36才、48才、60才、72才、84才、の年男、年女の皆さん、福を巻いて徳を積みましよう。皆様の御参加、お参り、お待ち申し上げます。詳細は 東光院 電話 0476(46)2471まで

救って下さるのじゃよ。死後に生まれ変わる、六道輪廻の思想は釈尊の時代以前から有った思想じゃが、釈尊は現世、又來世に於いても、十界が有ると説かれたのじゃよ。その十界とは、六道の迷いの境涯と悟りを求める心境、声門道、縁覚道、菩薩道、仏道の世界、合わせて十の世界、これは己の心を十段階に分節したもので、一瞬仏様のような心を抱いても、すぐに消えて地獄の苦しみの境地をさま迷ってしまう。私達の心は移りやすく弱いものじゃ、と言っておられるのじゃよ。と言う事は、六道輪廻の世界は、私達の心の中に存在し、お地藏さんも私達の身の回りに居て下さる言うことなんじゃよ。ところで、お地藏さんの眞の呼び名を「オンカカカピサンマエイソワカ」と言うのじゃが、この「カカカ」とはね、お地藏さんの笑い声だそうなんじゃ。お地藏さんは、どのような苦しい時でも「カカカ」と苦しみを笑い飛ばして下さるのじゃよ。お母さんの事を、昔はカカ様と言、現在はお母様と言うように成ったが、この語源はここから来ているのじゃよ。苦しみも、悲しみも、お地藏さんのように、慈愛心を持って「カカカ」と笑い飛ばしてしまおうね。